

# 中国におけるキリスト教の 本色化（土着化）運動

—教会の自立・連合を中心に

徐 亦 猛

1922年4月、北京郊外の清華大学において「世界基督教学生同盟」(World Student Christian Federation: WSCF)大会が開かれ、その大会を契機として全国的規模の反キリスト教運動が起った。反キリスト教運動の期間中、中国の文化人や知識人はキリスト教に対して猛烈な批判を展開した。そのような厳しい社会情勢の下に、中国キリスト教知識人が立ち上り、反キリスト教運動からの批判に対抗して、キリスト教本色化運動を提起したのである。中国におけるキリスト教本色化運動に積極的に参加した教会の指導者や知識人たちは、キリスト教が国家再建のために具体的に貢献できる可能性を模索していた。つまり、「洋教」と呼ばれるキリスト教が、どのようにして中国文化との関連を見出すことができるのかということである。結局本色化運動の指導者たちは、福音と文化、中国伝統文化とキリスト教信仰を深く関連づけることによって、キリスト教を本色化しようと試みたのである。さらに中国教会を西洋教会から独立させ、中国キリスト者の利益は全民族の利益に服従することが、中国キリスト教会にとって唯一の進む道であることを認識した。

西洋から伝来したキリスト教は、西洋の伝統・文化・思想などを固守するゆえ、中国の社会環境の中にあつた中国の文化と思想という栄養を吸収せず、結果として、中国の文化と思想とに対立し、中国に根を下し、実を結ぶことができなかつた。そのような状況を脱するために、1920年代のキリスト教本色化運動を通して、中国のキリスト教知識人は様々なキリスト教本色化の問題について議論を行い、解決方法を探った。この中国における本色化の議論については、現代の中国の思想界においても大きく注目され、かなり

の研究成果が出されている<sup>1</sup>。しかし、これまでの本色化についての研究では、一部の中国教会や教会の指導者たちが、本色化の必要性や具体的な構想についての理論的な考察や議論を、積極的な実践活動として展開したことは、十分に解明されていない。中国におけるキリスト教の本色化の問題を考察する際、単に歴史的背景や思想を検討するだけでは不十分であり、中国の教会の本色化における実践的な動向（自立・連合）も注目すべきであり、そのことにより、本色化の問題の全体像を見ることができる。

こうした研究状況に対して、本論文は、中国のキリスト教会による本色化運動の実践的な方向、すなわち教会組織の自立の歴史や連合の試みを考察し、本色化運動の実践的動向を新たに評価することを意図している。これによって、中国におけるキリスト教本色化運動は単なる学問や理論的な運動のみならず、キリスト教会における実践的な運動でもあることが、明らかになると思われる。更に、このような実践論的な考察は、今までの先行研究で行われていない新たな試みである。

## 一、19世紀末における自立教会の萌芽

19世紀末から20世紀の初頭までに、義和団の乱、新文化運動、反キリスト教運動など一連の反キリスト教の衝撃には、中国のキリスト者に大きな衝撃を与えた。その中の、一部の民族的な正義感があり、敬虔な信仰を持つキリスト教指導者が、中国におけるキリスト教宣教のあり方を熟慮し、中国の教会が帝国主義の影響から脱却する道を模索し、自立教会の実践を始めた。

自立教会とは、主として組織の面において西洋の宣教協会の支配と保護から離れ、経済面で宣教協会の財政援助を受けず、中国人聖職者が自主・自力で教会を運営し、独立の教会を形成することを目指すことである。

西洋の色彩の濃いキリスト教が如何にして中国の民衆に認めさせ、それと通じ合うものを感じさせて受容させるかが、一部の宣教師たちが宣教の過程で解決したいと願っていた最大の問題であった。初期の宣教師と中国の信徒

---

<sup>1</sup> 張西平・卓新平編『本色之探—20世紀中国基督教文化學術論集』、中国廣播電視出版社、1999年。王成勉著『文社的盛衰』、宇宙光出版社、1993年など参照。

とがそのために少なからぬ試みを行っているが、例えば、モリソン（馬礼遜 R. Morrison）は梁発を選び出して養成し、ブーン（文惠廉 W. J. Boone）は黄光彩を援助し同行させ、中国人聖職者を育成してキリスト教を宣教させた。後には梁発や黄光彩などの第二世代、更には第三世代に及んでまでも、西洋の宣教協会の特別な訓練を受けることができた。しかし、このように訓練を受けた人々はほんの少数で、しかも彼らは中国民衆の中では異端者として蔑視され、結果として反って矛盾が増加した。また、思想的開明な宣教師は、教会の自立について深く考えていたのである。19世紀の中頃、福州で宣教活動を行っていた宣教師ポールドウィン（保靈 S.L.Baldwin）は、「中国の教会は自立すべき」というスローガンを主張し始めた。彼の主張が宣教師たちの支持を得て、福州地区の宣教会議において、現地の中国教会が経済的自立の方針を決議した<sup>2</sup>。1862年には、廈門で宣教していたアメリカ長老会の宣教師タルマージ（塔瑪吉 Talmadge）が同地域において同じ教派の各宣教協会が連合し、自立の教会を設立するよう提案している。しかし、中国教会の経済自立は幾重にも困難に直面していて、教会に属している多くの信徒は貧困且つ社会の下層階級であった為、教会の経済を維持する力は全くなったのである。このような経済的基盤の弱い中国の教会が西洋の宣教協会から経済的に自立することは、まさに机上の空論であった。更に現実には、宣教師たちは各自が属する宣教協会から献金を調達し、中国の教会に経済的な支援をすることによって、実質的に教会の行政を支配していたのである<sup>3</sup>。

真の民族主義と愛国主義の思想で自主・自立の教会を建てるのは、やはり中国のキリスト者の自力に頼らなければならない。19世紀の半ばから、既に、中国のキリスト者が懸命に経済的に自立する教会を運営していた事例が窺える。

例えば、広州に陳夢南という知識人がおり、キリスト教に接触してから自分だけで聖書を研究し、キリスト教の教えを敬慕していたが、宣教師に洗礼を授けてもうら決心ができなかった。陳夢南は、中国の堂々たる儒生の身である自分が、西洋の宣教師に洗礼を受けることについて決断できなかった。

<sup>2</sup> S.L.Baldwin, *Self-support of the Native Church, Records of the General Conference of the Protestant Missionaries of China*, Shanghai; Presbyterian Mission Press, 1877, pp.283-284

<sup>3</sup> 湯清、『中国基督教百年史』、香港道声出版社、1987年、658-659頁参照。

その後、彼は肇慶である中国人伝道者と出会って、その方に洗礼を受けた。受洗後、陳夢南は、キリスト教が天道であるから、中国の信徒は当然自分の教会を建設し、自力で宣教活動を行うはずのものと認識し、1872年に、何人かの広州のキリスト者と海外の広東籍居留民の助けにより場所を借りて、教会を設立した。翌年には彼は「粵東広肇華人宣道会」を創立し、それまでの教会を華人宣道教会と名づけた。この「粵東広肇華人宣道会」は、中国人自身が自立して運営したもので、後には40余りの教会設立へと発展している<sup>4</sup>。

ほぼこれと同時に、上海のパプテスト教会の信徒黄益山が、米屋を開業し、日曜日には店を閉めて従業員を隣の教会に説教を聞きに行かせるということがあった。後に米屋の経営は成功し、暮らしも豊かになり、老西門の土地を買い入れ、福音堂を設立し、伝道者を招聘し、宣教の経費は全て彼が提供していた。これが恐らく上海における最初の外国の宣教協会の経済的支援を受けなかった教会であろう<sup>5</sup>。

そのような経済的自立を実現した教会は19世紀末まで100軒くらいあったが、厳密に言えば、その中の大多数の教会は完全な自立教会ではなく、単なる経済上の自立であった。その原因は中国人信徒の神学的基礎が弱く、自力の伝道を実現することの難しさ故に、教会はかなりの部分において宣教師や外国の宣教協会に頼らざるを得なかった。現実の問題として外国の宣教協会の支配・保護から離れ、中国人の自立教会を作ることができるようになったのは20世紀初頭以後であり、20世紀に入ってから、中華民族による反帝国主義運動が日増しに高まっていく情勢が自立教会の発展を促進したのである。

## 二、20世紀初期における中国人教会<sup>6</sup>の自立の動き

20世紀の初めに、義和団の乱の失敗や西洋列強との数々の不平等条約の

<sup>4</sup> 段琦「從中国基督教歴史看教會的本色化」『世界宗教研究』、第1号、中国社会科学院、1998年、139。

<sup>5</sup> 姚明權、羅偉虹著『中国基督教簡史』、宗教文化出版社、2000年、171頁。

<sup>6</sup> 中国人教会とは、西洋教会や宣教師からの経済援助を頼らず、中国人聖職者の自力によって建てられた教会と指す。

締結でもって、中国は尽大な屈辱を蒙った。帝国主義列強の侵略行為は、中国人を激怒させ、このような状況に直面して、一部の愛国的なキリスト教指導者は、西洋列強に対して強い不満を覚えている。このことは、20世紀初頭における同一教派の教会自立運動のために思想的な基礎の形成を促すものであった。日本の学者山本澄子の分析によると、この教会の自立運動の動きには二つの種類があり、一つは、個々の教会が独立し、従来の欧米宣教協会とは無関係に各々独自の構想をもって宣教するタイプであり、もう一つは、個々の中国人教会を大きな一つの合同教会と考へて、その自立をはかるタイプである。前者を個別型、後者を合同型と呼ぶ<sup>7</sup>。

個別型をあげると、先ず上海の俞国楨の指導によって成立した「耶穌教自立会」は模範的な存在であった。中国人の伝道者として俞国楨は、1894年に上海虹口区長老教会の牧師として務めたが、その後、閘北区長老教会（閘北長老会堂）へ転任した。その際、宣教師が閘北長老会堂の経済と指導権を全て握り、赴任したばかりの俞国楨が提示した色々な建設的な意見は全く無視され、このことは俞国楨の民族自尊心に大きな傷を与えた。更に彼は、不平等条約によって保護された教会が直面した社会的な危機を痛感し、中国の教会における将来の発展のため、教会が西洋の宣教協会や宣教師の支配・保護から離れて経済的に自立し、自主的に教会の活動を展開するという考えが芽生えたのである。俞国楨の考えは、閘北長老会堂の中の社会的地位高い中国人信徒たちの支持を直ちに得た。彼の説得によって、教会の信徒は熱心に教会の財政を支持したので、1906年に俞国楨は以前にその教会を支配した宣教協会と宣教師に向けて、経済的自立と宣教協会から離れることを宣言し、教会名を閘北自立長老会堂と改名し、「上海耶穌教自立会」が正式に発足した。「上海耶穌教自立会」が発足後、清朝政府からの正式な承認も得たので、当時の社会的な情勢のもと、清朝地方政府の一部の官員がこのような自立教会を支持することによって、自らの愛国心を表明したと考えられる。更に、閘北長老会堂の長老執事の中、挙人、医者など多数の所属や、中国最初の民営の商務印書館の職員である一部の信徒が、ある程度の経済力があったので、当該教会の経済的自立への強力な基礎を据えたのである。その後、

<sup>7</sup> 山本澄子『中国キリスト教史研究』、山川出版社、2006年、36頁。

俞国楨は、江蘇省、浙江省の沿岸部に彼の影響によるいくつかの小さい自立教会を連合し、1910年には閩北堂で「中国耶穌教自立總會」(China Jesus Independent Church)を設立するに至った。翌年には『聖報』という雑誌も発行されている。辛亥革命以後、自立会は更に発展し、海外の華僑信徒たちも自立会へ入会し、かなり経済的にも貢献した。1915年7月には上海で第一次代表大会を開催し、130名の信徒が大会に出席した。大会中、自立会の規定を定め、「中国耶穌教自立会全国總會」と新たに改名し、俞国楨は初代の総会長に選出されている。更に1919年には、上海江湾で自立会全国総本部一永志堂が設立され、全国總會に属する自立教会は350軒、信徒も2万人以上にのぼり、西洋の宣教協會と同じ規模にまで発展した<sup>8</sup>。俞国楨が自立会を設立した趣旨は、「以期消弭教案，保全教会名誉」(キリスト教の教会と中国人との衝突によって引き起こされた事件をなくし、教会の名誉を保つ)である。当時中国の民衆から見れば、宣教師が支配した教会が西洋列強の侵略の手先であると見なされ、民衆と宣教師の間にしばしば衝突が起こった。しかし、このような教会の経済的自立によって、教会が西洋の宣教協會と宣教師のコントロールから解放され、民衆の猜疑も解消し、キリスト教の宣教が半分の労力で倍の成果を挙げている。自立会に属した各教会は、内外の中国人信徒から資金を集め、教会堂を建設し、教会の経済を軌道に乗せ、完全な自立を宣言したのである。

次に、中国人教会の合同型の動向については、先ず山東基督教自立会があげられる。辛亥革命以後、登州文会館の卒業生である山東青島長老教会の長老劉寿山が中心となり、山東済南に自立教会を設立することを計画した。彼の計画は、当時の山東省政府官員と信徒の支持を得て、1911年に政府の土地使用許可のもと、彼と支持者の出資によって、1500人収容できる自立教会と周囲に400軒の宿舎を建てることであった。宿舎の賃貸料が教会の経常経費、教会附属学校、老人ホーム及び伝道者の生活費として使われた。このような済南自立教会の努力によって、教会における経済の自立の願望が達成し<sup>9</sup>、山東全省の各地方の教会に大きな励ましを与えた。その後、1916年に

<sup>8</sup> 韓鏡湖「中国耶穌教自立会全国聯合大会記実」『中華基督教年鑑』、第6号、1921年、57頁。

<sup>9</sup> 二忘「中国教会早期的自立運動」『天風』、第13号、1957年、18頁。

劉寿山所属の山東青島長老会の信徒たちも教会の自立を考え、慎重に討論した結果、外国の宣教協会から離れ、中国人牧師を招聘し、自立的な「山東中華基督教会」という名称の組織変更を行った。更に2年後、同じ劉寿山の指導のもと、山東煙台に「煙台中華基督教会」を組織し、済南、青島、煙台は山東省の自立教会の中心となった。その後、山東各地において、相次ぎ自立教会が組織され、1924年には山東省と山西省に及んで「華北中華基督教会」という完全に中国人が運営する諸教派合同の教会が成立したのである<sup>10</sup>。

中国人教会における経済的自立の実践は、二つの影響を受けている。一つは、国際的状況の影響であり、第一次世界大戦となって、宣教事業のための西洋の教会による送金が不安定となり、減少する傾向もあった。もう一つは、国内的状況の影響であり、西洋の教会によるコントロールから離れたいため、西洋の教会と区別する必要があった。この二つの影響によって、中国のキリスト者の間に教会の経済的自立を要望する声が強くなっている。

### 三、20世紀における中国の教会<sup>11</sup>の大連合

20世紀初期において、完全に経済自立した教会はわずか一部しかなかった。多くの教会の経済は西洋の母教会や宣教師の援助に頼り、教会の主導権を持っていなかった。その意味で、中国の教会における組織・経済の本色化の実践において、最も重要なのは中国の教会各教派の連合である。本色化した中国の教会は自身の弱い立場を克服するために、西洋の宣教協会が中国に伝えた教派的な背景の相違を破棄し、教派間の連合・合同と協力を目指した。そして医療・宗教教育などキリスト教宣教事業を通して、各教派は外国教派を背景とした相互の壁を壊し、教会の「洋教」という色彩を取り除いたのである。歴史的な原因から、1858年に中国と西洋列強との間で不平等宣教協定が結ばれて以降、中国へ伝来した西洋の宣教協会は130以上あり、各宣教協会は中国国内で独自の宣教機構や教会を設立し、教会の内部における

<sup>10</sup> 王治心『中国基督教史綱』、上海古籍出版社、2004年、214頁。

<sup>11</sup> 中国の教会とは、西洋宣教師によって建てられた教会であるが、その後教会の主導権を宣教師から中国人キリスト者に移行した教会と指す。

教派間の対立や攻撃が非常に大きな問題となった。中華基督教協進会の指導者たちは、「中国へ伝来した各宣教協会の名称は異なるだけでなく、考え方も様々であったため、信仰の浅い信徒たちはそれを区別することができず、自分は英国の教会に属している、アメリカの教会に属していると口々に自称する傾向があった」<sup>12</sup>、「同じ場所で様々な教派が宣教事業を行ったので、教派間の対立や摩擦がしばしば起った」<sup>13</sup>と述べた。更に、西洋から伝来した各教派の神学間での争いによって、「中国の教会は絶えず新旧の争いに困惑され、双方の衝突や対立は深刻化し、政治、国際、種族などの問題についての意見の相違が明らかになったことから、教会は大きな危機に直面することになった」<sup>14</sup>と認識した。中国における各教派の連合・合同は本色教会の建設にとって、窮地に陥った。中華基督教協進会総幹事誠静怡は「現在の基督教会は有限の勢力で目の前の無限の時機に対応するためには、最も緊密な協力関係を持つが必要である」<sup>15</sup>とコメントした。

中華民国を成立以後、中国の教会の連合・合同は下準備と実施の段階に入った。米国長老教会の宣教師ローベンシュティン（羅炳生 Edwin C. Lobenstine）はこのことについて、「教会連合・合同運動の展開において、第一に必要なのは、教会自身の発展である。第二には、各教派の教義の内容に共通する点があることを宣教師たちが自覚することである。各教派間は互いに対立し、独自宣教するのではなく、連合・合同し、協力し合うべきである。そうすれば、大きな宣教結果が得られる」<sup>16</sup>と述べた。

宣教師たちと中国人教会の指導者は各教派の合同団結によって、緊迫した社会情勢に対応できると考えたのである。教派の連合・合同について、教会内部において繰り返し、熱心に討論した後、実行可能な四つの方式がまとめられた。先ず同じ教派のもとにある各教会を統一することである。例えば、バプテスト系の各教会を「中華浸礼会」、ルーテル系の各教会を「中華信義

<sup>12</sup> 誠静怡「本色教会之商榷」『文社月刊』、第1巻第1号、1925年、5頁。

<sup>13</sup> 余日章「将来西教会对于中国の教会合作之性質与分量」『文社月刊』、第2巻第7号、1927年、88頁。

<sup>14</sup> 同上、88頁。

<sup>15</sup> 誠静怡「中国基督教的性質和状態」『文社月刊』、第2巻第7号、1927年、60頁。

<sup>16</sup> 羅炳生「中国教会聯合事業之進歩」『中華基督教會年鑒』、第4号、1917年、199頁。

会」と統一する。このような合同・連合は内部的な整合であり、教義、組織、人員の配置、経済の調達など最小限度の調整によって可能となる。教会内部の人々は比較的このような調整を受け入れ易く、これは最も障害の少ない近道であり、将来の広い範囲における各教派連合・合同の最初の一步として認識された。第二に、同じ地域の各教会の連合・合同によって教派を超える大きな連合体を設立することである。これらの地域の教会指導者は、教派を越え、相互に協力し合うことで、現地の重大な社会問題を解決したり、社会福祉事業の展開や臨時的な突発的な事件に対応する上で大きな助けになるなどの価値を認めた。後に述べる廣東基督教会は長老派や公理会など八つの教派が連合した教会組織の例である。第三に、教会の一部の指導者は、教会の統一を強制的に求めずに、一定程度の超教派の連合体を設立し、公の問題における行動一致を図った。例えば、中華基督教協進会及び各省の基督教協進会の存在である。このような形式的な連合・合同により、諸教会はあらゆる重大問題を解決するために比較的まとまった組織として対応でき、未来において各教会が連合するための現実的に実行可能な土台を提供した。第四に、教会の一部の組織（例えば中華基督教教育会、衛生会、日曜学校会など）は、教育、医療などの社会公共事業を通してよりよくキリスト教社会事業を展開し、それにより場所や地域を越えて協力することを強調した。このような協力によって、様々な社会問題に直面しても、スムーズに問題が解決できるようになり、教会における社会事業の発展や社会的な影響を拡大することも可能になった<sup>17</sup>。

以上の方式に基づいた、この時期のキリスト教各教派の連合の模範的な事例として挙げられるのが、廣東基督教会である。1924年11月24日、廣東地区の教会連合を促進する組織である「跨差会委員会」（Inter-missions Committee）は、国内事務委員会（Board of Home Missions）を設立し、各宣教協会からの宣教とミッション・スクールへの献金を統括的に管理し、西洋の宣教師と中国人教会指導者が同じ組織の下に協力し合い、宣教活動を行うことを提案した。その提案を受け、1925年末に長老会、公理会など八つ

<sup>17</sup> 誠静怡、「本色教会之商榷」、6頁。霍德进「中国教會的聯合問題」『文社月刊』、第2巻第9号、1927年、17-21頁。

の教派が連合して、中華基督教会廣東支部の設立を計画した<sup>18</sup>。それまで各宣教協會が管理していた宣教師の活動資金は、全部連合の中国の教会の管理のもとに置かれ、宣教師の働き場所は全て廣東支部が直接決めた。廣東地区にいる全ての宣教師は中国の教会のメンバーとなり、新しく派遣された宣教師については、廣東支部が直接に国内事務委員会と協議したうえで任命した。宣教活動を展開するために西洋の宣教協會に属する財産は全て中国の教会へ引き渡し、廣東支部が全て海外の教会からの献金を管理し、直接海外の教会へ連絡を取り、定期的に教会の年度活動報告及び財務報告を海外の教会へ提供すると同時に、宣教、教育、医療の分野について、独自の理事会を設立し、全ての高等教育、医療活動を管理した。以上の計画における細かい部分の制定について、各教派の教会による改訂と承認が必要であったが、この計画は全体的な原則として各教会と宣教協會に受け入れられた。こうして各教派の宣教協會は独立性を失い、全て中国の教会に吸収されることとなった<sup>19</sup>。1926年6月に開かれた第八回年会において、大多数の宣教協會が教会の管理運営を中国人に手渡すことに同意した<sup>20</sup>。

そのほか、1925年8月、汕頭地区の一つ5000名の浸信会団体は宣教師の助けによって、独立中国の教会（汕頭浸信会協會 Baptist Convention of the Swatow District）を成立した。汕頭浸信会協會の任命委員会が全ての宣教、医療、教会などの働きを管理し、宣教協會に属する財産を汕頭浸信会協會に移行することを宣教師たちと交渉し、宣教師たちの賛同を受けた。そして近い将来特別機構を作り、宣教協會に属する財産を処理し、合法的な方法で中国の教会へ移行することを決めた<sup>21</sup>。

地方の本色化実践の影響を受けながら、全国的な組織の実践的な動向も現

---

<sup>18</sup> Eugene E. Barnett, *Cooperative Christian Activities in China in 1925*, in Rev. Frank Rowlinson (ed), *China Christian Year Book*, 1926, pp.95-96.

<sup>19</sup> George H. Mcneur, *Chinese Christian Autonomy*, in Rev. Frank Rowlinson (ed), *The Chinese Recorder*, 1926, pp.17-18.

<sup>20</sup> Annual Meeting of the Kwang Tung divisional Council of the Church of Christ in China, in Rev. Frank Rowlinson (ed), *The Chinese Recorder*, 1926, p.461.

<sup>21</sup> T.C.Bau, *Changes in the Chinese Church*, in Rev. Frank Rowlinson (ed), *China Christian Year Book*, 1926, p.135.

れた。最も代表的な実践は中華基督教会の成立である。中華基督教会は20世紀前半において、中国国内の最大超教派の連合・合同教会である。中華基督教会の成立の流れは以下の通りである。義和団の乱以後、長老教会は八つの教会を合同して「中華基督教長老会」を設立した。中華基督教長老会は単に諸教会の合同を目的としたのみならず、宣教協会から独立した「中国の教会」を作ることも意図されていた、と考えられる<sup>22</sup>。1901年から数回の会議を経て教会の連合・合同について討論した。1918年4月17日に南京で開かれた中国基督教長老会の総会にロンドン会と公理会とが参加し、「中華基督教合同教会」を作る計画が立てられ、1922年4月に上海でこの三つ教派の代表を中心として「中華基督教会臨時総会」を設立した。そしてついに、1927年10月、上海で最初の総会が開かれて、全国組織の「中華基督教会」が正式に発足した。全国総会に参加した88名の代表のうち66名が中国人の指導者で、彼らは12の教区と51の分区とを代表していた。中国全土で14の教派が中華基督教会に加盟し、数百の教会堂が含まれ、会員の数に12万を超え、全国キリスト者人口の約三分之一を占めた。会議では全会一致して誠静怡を初代会長に選び、参加したあらゆるメンバーが明確に旧教派の思想を放棄し、「教派を超え、一つにする」という原則に基づいて、本色教会運動を推進し、中国の教会の総体的な合一を目指した。中華基督教会は、中国人信徒が正統な信仰に根ざして、自分から主体的に動いて結成した中国国内の最大の超教派の連合・合同教会であった。教派的伝統を奨励せず、国の境界によって分かれたれず、ただ中国の社会情勢に適合することと、中国社会の需要に対応することが求められた<sup>23</sup>。このような教派間の連合・合同によって、教会の組織が強くなり、中国の教会の統一と団結を促進し、反キリスト教運動からの衝撃への対応や教会における本色化の建設へ組織的な準備を提供した。

---

<sup>22</sup> 山本、前掲書、60頁。

<sup>23</sup> 姚明權、羅偉虹、前掲書、187-188頁。

## 結論

1920年代に中国の教会は、国内の情勢不安と国外からの侵略という不穏な時代の下に、キリスト教が中国の文化社会系統の中に根を下ろして、開花し、実を結び、それによって緊迫した情勢から脱出するために、キリスト教の本色化に迫られた。キリスト教本色化の枠組みのもと、西洋から伝来した各キリスト教派が中国で独自の活動を展開し、しばしば教派間に対立の事件が発生し、全体の宣教活動に悪い影響を及ぼした。こうした状況を打開するため、各教派の連合・合同によって教会を組織的に強くし、中国教会の一致と連帯を促進することが求められた。この取り組みは、反キリスト教運動からの衝撃に対応し、本色教会の建設へと組織的に準備するものとなった。しかし、中国の教会の経済と組織が変革されなければ、民衆は永遠にキリスト教を「洋教」と呼び、キリスト教は中国社会の中に浸透できないだろう。中国社会と緊密な関係を持ち、中国文化の神髄とキリスト教とを融合することによってはじめて、キリスト教は中国と西洋の精華になることができる。教会組織の自立や連合などを通して、中国キリスト教は、中国人にとって身近なものとなり、入信しやすくなる。これは、中国キリスト教の特色となり、世界のキリスト教会にとっても模範的なものになる<sup>24</sup>。このように、教会の経済的自立、組織的自治と自力的宣教という三つの実践的な方向が互いに緊密に関係づけられることによって、教会という具体的な場における実践を推進し、キリスト教が中国の社会の中に根を下ろし、中国文化の精華を吸収することを可能とする。勿論、これは相当困難な作業であり、絶えず模索し、実践し続けることが必要であり、中国におけるキリスト教の本色化は長い道を辿らねばならないであろう。

---

<sup>24</sup> 洪煒蓮「西方基督教徒対於中国的貢献」『文社月刊』、第2巻第7号、1927年、78頁。